

令和6年度 全国学力・学習状況調査の分析について(概要)

1 調査の概要

(1) 調査の目的

本調査は、児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的としている。

なお、本調査により測定できるのは学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面である。

(2) 調査日時 令和6年4月18日(火)

(3) 調査事項

ア 教科に関する調査(国語、算数・数学)

イ 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

①児童生徒質問紙(小・中学校):調査する学年の児童生徒を対象とした、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

②学校質問紙(小・中学校):学校を対象とした、指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査

(4) 調査対象

国・公・私立学校の小学校第6学年、中学校第3学年(原則として全児童生徒)

(5) 調査問題

学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題

(6) 今年度の調査の特徴

児童生徒質問紙は、児童生徒の活用するICT端末等を用いたオンラインによる回答方式で実施した。なお、ネットワーク環境を考慮し、4月10日(水)から4月30日(火)の期間で分散して実施された。

(7) 神河町の状況

ア 教科に関する調査の状況

学 年	教 科	神 河 町
小学校 6 年生	国 語	ほぼ同程度
	算 数	上回っている
中学校 3 年生	国 語	下回っている
	数 学	やや上回っている

イ 結果の分析

小学校

【 国 語 】

<問題からみえた課題>

- 話し言葉と書き言葉との違いに気づくことができる
- 目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる

- 登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができる

<問題からみえた成果>

- 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる
- 人物像を具体的に想像することができる

【算数】

<問題からみえた課題>

- 計算に関して成り立つ性質を活用して、計算の仕方を考察し、求め方と答えを式や言葉を用いて記述できる

<問題からみえた成果>

- 問題場面の数量の関係を捉え、式に表すことができる
- 除数が小数である場合の除法において、除数と商の大きさの関係について理解している
- 球の直径の長さや立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができる
- 除数が小数である場合の除法の計算をすることができる
- 道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる
- 円グラフの特徴を理解し、割合を読み取ることができる
- 簡単な二次元の表を読み取り、必要なデータを取り出して、落ちや重なりがないように分類整理することができる
- 折れ線グラフから必要な数値を読み取り、条件に当てはまることを言葉と数を用いて記述できる
- 示された情報を基に、表から必要な数値を読み取って式に表し、基準値を超えるかどうかを判断できる

中学校

【国語】

<問題からみえた課題>

- 資料を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように話すことができる
- 意見と根拠など情報と情報との関係について理解している
- 話合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができる
- 目的に応じて必要な情報に着目して要約することができる
- 目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる
- 文脈に即して漢字を正しく書くことができる
- 表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる
- 行書の特徴を理解しているか

<問題からみえた成果>

※該当する設問はなし

【 数 学 】

<問題からみえた課題>

※該当する設問はなし

<問題からみえた成果>

- 等式を目的に応じて変形することができる
- 簡単な場合について、確率を求めることができる
- 目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができる
- 与えられたデータから最頻値を求めることができる
- 複数の集団のデータの分布から、四分位範囲を比較することができる
- 筋道を立てて考え、証明することができる

2 各学校の取組状況と正答率との関係

小6の算数・中3数学が、教科別の平均正答率で全国の正答率を上回った。一方、国語はほぼ同程度か、下回る結果となった。前回までの調査と同じく、学習指導要領が重視する「思考・判断・表現力」を図る問題、特に記述式の問題での問題で平均正答率が低くなったり、無回答率が高くなったりする傾向があった。

全国平均と比較して、正答率が10ポイント程度低かったのは記述式の問題であった。その中でも、中3数学では、いずれも説明問題で目的や意図に応じ、自分の考えが伝わるように書き表すことに課題がある結果となった。一方で、全国の正答率と比較して10ポイント以上高くなっている問題は、いずれも「知識・技能」を図る問題であった。

無回答率が一番高かったのは、中3数学の前方の障害物を感知して止まる車型ロボットを題材とした問題であり、正答率も最も低かった。この問題は、車型ロボットの進んだ距離について「速度が速くなるにつれて進んだ距離が長くなる傾向がある」と主張できる理由を、データの分布を表す「箱ひげ図」を使って読み解く記述式問題で、箱ひげの「箱」の位置に着目すべきところを、最大値や「ひげ」の長さなど他の要素に着目した誤答もあった。

特に課題と考えられる項目として、兵庫県教育員会は、小学校国語では「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」を挙げ、中学校国語は「他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめること」と指摘している。

(1) 小学校 国語

学習指導要領の内容別に「話す・聞く」「書く」「読む」を比較したところ、「読むこと」の正答率が最も成績がよかった。

現行の学習指導要領で新設された「情報の扱い方に関する事項」からの出題では、「高山さんのメモ」を見て、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を多くの児童が理解できていた。しかし、そのメモを基に空欄に入る内容を、条件を踏まえて記述する問題では正答率が低くなった。目的に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題が浮かんできた。

(2) 小学校 算数

正答率が80%を超える問題が4問あった。その内全国平均より高かった問題は、2問だった。一つ

は、 $540 \div 0.6$ を計算する問題で、もう一つは、円グラフから2023年の桜の開花日について、4月の割合を読み取る問題であった。

一方、直径22センチのボールがぴったり入る箱の体積求める式を書かせる問題は、正答率が低くなった。立方体の一辺の長さは球の直径と等しいことを理解していれば解けるが、球のイメージに引きずられて無関係の円周率(3.14)を用いて解いた児童がいた。

家から学校までの道のりが等しく、かかった時間が異なる二人の速さについて、どちらが速いかを判断し、そのわけも書く問題でも正答率が低くなっている。道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断することは多くの児童ができていたが、その理由を言葉や数を用いて記述することができていなかった。

(3) 中学校 国語

全国の正答率と比較して5ポイント以上低い問題があった。また、3問あった記述式の問題でも正答率が低い結果になった。この傾向は、全国の全体の正答率にも表れており、前回(70.1%)から10ポイント以上低くなり58.1%にとどまっている。

ネット利用が進む中、情報リテラシーに関する出題された。「フィルターバブル現象」に関する話し合いのメモを読んで現象の特徴を説明し、他者の発言と結び付けてまとめた自分の考えを記述する問題が最も低かった。話し合いの話題や発言を踏まえて、自分の考えを書くことができていなかった。

物語を書くために集めた材料を取捨選択した意図を説明したものとして適切なものを選択させる問いは、全国の平均正答率より低い結果となった。目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを計画にする力が身に付いていないことが分かった。

(4) 中学校 数学

全国平均と比較して、「学習指導用の領域」「評価の観点」「問題形式」の全ての分類で上回る結果となった。また、全16問中のうち11問で正答率が全国平均を上回り、全国平均正答率と比較して5ポイント以上高い問題が6問あり、10ポイント以上の問題も3問ある結果となった。しかし、無回答率が5%以上ある問題もあった。

正答率が低い問題は、18リットルの灯油を使いきるまでの「強」の場合と「弱」の場合のストーブの使用時間の違いがおよそ何時間になるか求める方法を、式やグラフを用いて説明する問題で、問題解決の方法を数学的に説明する力が足りないことが分かった。

3 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査の考察

「学校生活を充実させる質問」の中で、「学校に行くのは楽しいと思いますか」「友達関係に満足していますか」という質問には小6、中3のほとんどが肯定的な回答をしていた。「授業に主体的に取り組んでいますか」という問いに対しては、中3より小6の方が肯定的であった。

不登校児童生徒数が年々増加している状況において、多様な不登校の背景や原因を考慮し、解決策を考えていくことが求められている中で、これらの結果を基に一人ひとりの児童生徒に向き合うことで、課題の解決に繋げていくことも必要である。

「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に肯定的に回答した割合は、令和4(2022)年度調査から、小中学校共に増加傾向にある。小6、中3ともに30%を超えて増加している。この傾向は全国でも同様で、新型コロナウイルス感染症の拡大が収まり、学外での活動が活発になり、社会とのかかわりが増えてきたことが要因と考えられている。

「将来の夢や目標を持っていますか」という問いには、コロナ禍の令和3(2021)年度調査では低い数値であったが、今回の調査では、小6で改善が見られた。しかし、中3は令和4年度から減少傾向が続いている。県は体験教育やキャリア教育の充実で生徒児童の自己有用感を高めていきたいとしている。神河町でも、冬の自然体験や神河ふるさと学習を通じて自己有用感や自己肯定感を育てる教育を進めている。

「普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などをしますか(携帯電話やスマートフォンを使って学習する時間やゲームをする時間は除く)」というSNSや動画を視聴する時間を尋ねた質問では、3時間以上と答えたのは小6や中3で減少傾向するという結果になった。中3で「4人に1人が3時間以上」という結果(全国の割合は、「3人に1人が3時間以上」)になった。「SNSなどの使用時間の増加は学力低下につながっていないか」という疑問があるが、文科省は、「『学力』が下がっているなら憂慮すべきだが、そういった事態になっているとは判断できない」としている。しかし、SNSなどの使用時間が「3時間以上」のグループは、スマホなどを「持っていない」グループより正答率が低かったことを挙げ、「一定の使用時間の長さが影響を与えていることは見て取れる」として、長時間使用に警鐘を鳴らしている。

英語教育に関する質問も増えてきている。小学生が「英語の勉強は好きですか」や「英語の勉強は大切だと思いますか」という質問に対して、令和5年度より増加している結果となっている。特に、英語の勉強が大切だと考える児童が、令和5年度と比較して10ポイント増えている。

中学校においては、「文法や語彙等の知識がどれだけ身に付いたか」という基礎基本の部分を大切にしながら、英語教育の目標である「英語を用いて何ができるようになったか」というコミュニケーション能力を身に付けることを充実していく必要がある結果となった。

4 調査結果の分析や授業改善に向けた取組

各校において調査結果の分析を行い、強みや課題を明確にした後、それぞれの課題解決に向けた取組を推進していく。その際、「『児童生徒にどういった力が身に付いたか』という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められる。」(学習指導要領解説(総則編))ということを含頭に置いた校内研修になるようサポートしていく。

また、目標(めあて・ねらい)を示していることについては、教員の意識も児童生徒の意識も高まっているが、振り返る活動については、教員の意識に比べて児童生徒の意識は低いというデータを示して、さらなる授業改善を目指していく。

ア 国語、算数・数学の課題に対する取組

- ①課題の見られる設問について、詳細な分析を行い、課題の解消及び「学びに向かう力」の育成に向けた指導資料の作成等、学力向上に向けた取組を実施していく。
- ②国語については、記述式の問題に誤答が目立つので、「目的や意図に応じて複数の資料を用いて自分の考えを表現する力(活用・表現力)」の育成に向けた「かみかわトレーニング」の活用を一層充実していく。
- ③算数については、正答率の高い問題と低い問題の差が大きかったり、無回答の問題が目立ったりしている。その原因が観点によるものなのか、問題の形式によるものなのかを分析し、その課題

の解決に取り組んでいく。

イ 生活や学習習慣への取組

家庭や地域の人たちとともに児童生徒を育てていくという視点に立ち、「目指す児童生徒の姿」を共有しながら、家庭、地域社会との連携を深める取組を推進していく。